

「神の力と愛によって生きる」

マルコによる福音書12章18-27節

時として私たちは、「主イエスの御言葉や業は理解できるが、復活はどうも・・・」という言葉を目にします。確かに、死からの復活を信じるのは、容易ではありません。そんな人々が、現代だけでなく、主イエスの時代にもいたことが、今日の聖書で分かります。

聖書は「復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。」

(マルコ12:18)と始まります。サドカイ派とは貴族階級に属し、代々祭司を努めるグループで、その考え方は非常に現実的でした。復活を認めない彼らが主イエスのところへ来たのは、主を陥れるためと、理想主義的なファリサイ派を出し抜くことにありました。この日より少し前に、主は御自身の死と復活を弟子たちに三度予告されていますが、それは長老・祭司・律法学者らの耳にも届いていたと思われます。その結果、「復活」が主を陥れるのに格好の材料だと思った彼らは、申命記のモーセの教えを引用し、「もし復活があるなら、家名存続のため七人の兄弟に嫁いだ女は、誰の妻として復活するのか」と主に問うたのです。

モーセの教えを用いて、主を追い詰めようとしたこのサドカイ派は、旧約聖書の五書(創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記)のみを重要としていて、それに固執する彼らの信仰は、神殿の中での形式的な祭儀を大切にすることにありました。預言書や諸書を読まず、五書の中でも律法に関するものが大切と考えた彼らには、神の約束である救い主の姿が分からず、それどころか主イエスの言葉や業が律法違反と映り、何とかしてこの不審者を排除し殺さなければと考えるようになっていたのです。宗教界のリーダーである祭司長を選出するグループからのこの問いに対して主イエスは、「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。死者の中から復活するときは、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」(同12:24-27)と、モーセ五書を編集し聖典化した一族の子孫である彼らに、御自身もまたモーセの書を用いて、お答えになったのです。

復活した時の状態は、めとることも嫁ぐこともないこと。神の恵みとして主が祝福される結婚が、サドカイ派では家名を残すための便宜上のものとなっているが、いずれにしても結婚はこの世にのみ属するものであり、復活時に問われるものではない。人間は主イエスの十字架と復活によって、罪人である一人一人が直接神と交わり、各々神に仕える者とされるのであることなどを、厳しく叱りながらも、彼らに分かるように説かれたのです。

特に、歴史的事実としてのユダヤの民のエジプト脱出で、無力な民が戦うこともなく逃げ出すことが出来たのは、神の偉大な力によるものであり、これによって民が得たのは、解放だけでなく、人間性の回復であり、罪ある人間が神に仕え、神と共に生きることにあつたと言われたのでした。

主イエスが彼らに「読んだことはないのか」と言われた、神のモーセへの言葉、「わたしはアブラハムの神・・・」は、英語では「I am the God of Abraham,・・・」で、現在形となっています。しかしこの場合の現在形は、これはただ単なる現在形ではなく、過去・現在・未来を含む現在形です。すなわちく永遠>を意味していて、<神が今も生きておられる>ことを意味しているのです。

神のアブラハム、イサク、ヤコブへの約束は、主イエスの十字架と復活に於いて果たされますが、その主イエスの復活は、永遠の今の中に<主が、死に勝利された>という以外の何ものでもありません。ですから、この主イエスの真の力に与った者は、私たちもそうですが、その<復活の証人>として世界に出て行く使命を持っています。ペトロは、「・・・あなたがたは命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。」(使徒3:15)と民衆に語り聞かせています。

主の復活の後の世にある私たちは、ただ、ただ<信仰によって>復活の主の力に与ることが出来るという、なんとも幸いなことになっています。聖書は、この世のどんな力にも屈しない<神の力と愛による生き方>がここにあることを、私たちに伝えていると思われるのです。

(説教要約 羽入田悦子)